芸者駒代のこと

永井荷風の小説「腕くらべ」を読む

宏一郎　著

永井荷風（一八七九～一九五九）の代表作のひとつである「腕くらべ」は、荷風が親しんだ一時期の花柳界への思い入れを綴ったものというのが定説である。

彼自身好色小説と位置づけていたようだし、私家版と呼ばれる猥褻度の高い裏ものも彼自身の手になった（らしい）と言われるように、勿論楽しんで書いのだろう。

荷風は主人公の駒代に寄せて彼なりの芸者のひとつの理想像を書きたかったように思える。荷風の最も好いていた女の典型を彼の

芸で存分に目のあたりにするように創造し、描き出し、それを自分の意のままに動かすことによって自身の最も好ましいタイプの芸者をわがものにする気分に浸っていたのだろう。

荷風は随分女を書いているが、皆類型的な、いわゆる荷風好みの女ばかりであり、深みに欠けるともいわれる。当然だろう。彼は一般的な女など書いてはいない。荷風という男のための、ご都合主義の、「いい女」ばかりを書いている。そんな女が彼には必要だったのであり、彼が考える女は男のことだけを思っていればそれで良かったのだ。

もちろんそんな女も女の典型の一つであろうし、おんなはそれだけでいいとする荷風の思いの中の女性はそれで完結していたのだろう。時代の先端の高等教育を受け、当時としては稀な経験、米国とフランスに遊んだ荷風にしては不思議な感もあるけれど、もちろん外国で見た女も荷風の望ましい色眼鏡で見ていたということだろうか。

いや、なにもかも知っていて、ただ自身の美学に浸りこんで自分の作品の中の荷風的な女を創造したということなのか。

荷風に二度の結婚歴はあるが、すぐ失敗し、大方は独身のまま一生を過ごし、その一方で芸者や娼婦など風俗業界の女を好みかつ描いたことは、もちろん独身時代が多かったため、その世界に日頃から入り込む（その世界で性慾を満たす）ことを余儀なくされ、結果としてそれらに通暁していたこともあるだろうけれど、彼の多少偏った女性観がそんな生涯を歩む必然性を生んだとも考えられる。偏ったというのは言い過ぎかもしれない。

つまり、芸者や娼婦の積極的な肯定という感覚が、現今の女性観からみてずれているというほどの意味であって、現代人からみれば、やはり封建的な、差別的な女性観といわざるを得ないだろう。幸せな結婚生活を経験することなく、つまり普通の女性と普通の愛情ある生活を営むという経験がなく、独身を貫いた荷風には、いわゆる玄人の女しか知らなか

ったわけで、そんな女性観をずっと醸成する条件が備わっていたのだろうか。

「腕くらべ」の最初の部分で芸者についての印象を、作中人物の声を借りて荷風は言う。何も知らないあの時分には芸者というものが何となく凄艶に見えた。そして芸者から何とか言われるのが真実嬉しくてならなかた。

もちろん彼にもそんな時代が現実にはあったのだ。娼館の風景が人々の生活の中で自然に見えた、それが常識だった時代。世にある女がひたすら男に従属し、男に養われ、日陰に生きるだけで満足しなければならなかった時代。

そんな時代における芸者や娼婦は、一見男と同様に彼女自身の職業なのだろうが生業いという言葉が是に相応しいけれど、あまり使いたくはない。経済的に自立する人間の必然として、社会の一端を担う意味で「職業」は使われているわけであり、彼女たちに使うにはかなりイメージがずれてくるのは避けら

れない。だから、いわゆる職業婦人という大正デモクラシーの範疇に芸者や娼婦は入っていないはずだ）を持つことで、男と対等に渡り合うことも可能だったようにも思えるけれど、やはりそこは男あっての職業であり、所詮男に力負けする（専業主婦同様に、どんな人気芸者でも、顧客でもある男には絶対勝てないシステムになっているとも言える）弱い立場に過ぎなかった。

そんな弱さをひとつの美に見たてて書かれたのが荷風の文学なのだろう。その中でも「腕くらべ」の駒代ほど鮮明なものはない。東京の代表的な歓楽街の一世界である新橋芸者の若手代表格にまで昇りつめ、華やかな浮き名を流すまでになった彼女が一転、恋人にも旦那にも裏切られ、捨てられ、しかも同時期に彼女のよりどころである置き屋の女主人が急死するに至って身の置き所にも窮する、不幸な美女の物語。

もっとも、最後には死んだ女主人の亭主の厚意でその置き屋を任されることになり、やっと生活の場が確保されるという苦いハッピーエンドに終わるのであるが。

芸者という職業が現代では既に一般でないことから、そのイメージが掴みにくくなっているけれど、今風の用語を使うと、宴会に出て華やかさで場を盛り上げるコンパニオンということになるだろうか。客と半ば公然に寝ることは昨今のコンパニオンとは少々違うかもしれない。

もっとも、求められたら原則断れず誰の枕席にでも侍ることが仕事のすべてである娼婦と違うのは、馴染みの客以外には滅多に寝ないという他にも、踊りや三味線、端唄など宴会芸を身につけて同僚たちとその優劣を競うことで、彼女たちのセックス以外の存在価値や誇りも存するということになるのだろうか。

つまり、芸者とは昔の廓における上臈の機能全般を持って（成り立ちとして、娼妓の技芸の衰退を補うために吉原で発生した女芸人が最初とも）、しかしそのセックスを二次的なものにしたということなのだろう。比較的簡単にその身分から抜けることが可能だったのも社会の進化の現れなのかもしれない。

何事によらずたてまえと本音があるのは確かだけれど、技芸を第一とする芸者も若いうちは容姿が人気の優先ポイントで、歳がいくほどに技や芸で容色の衰えをカバーするというパターンになるのだろう。

更に歳がいけば過去についた大物旦那の名が箔になるらしい。（容姿も気立てもいい芸者は若いうちに手が付いて、上手く行けば本妻に引きたてられ、妾にされても、大役人や会社社長など身分の良い男か、そうでなくても一生安楽に暮らしていける経済的な力のある大尽なら悪くもない）引かれていき、そ

うでもない並みの芸者連れはそれをカバーするために芸ごとに精を出す。

いい旦那のついた芸者は芸ごとにもお金のかかる大看板の役者を師匠につけて腕を磨き、年に二回ある発表会で面目を施し、それでまた箔をつけて人気をあげる。彼女等に近い世界にいる歌舞伎役者と浮き名を流してまた別種の箔をつける芸者もある。

そんな表向き華やかな舞台の裏では、派手な交際のために必要な心付けや衣裳代などの経費がかさみ、多大の借金を抱えて苦しむ芸者も出る。そんな借金のために心なくも、金は惜しまないが野暮な大旦那の誘いを断れずに身を汚すことにもなる。

花形役者と浮き名を流すゴシップ中の芸者を見栄から宴の場に呼んだり、好んで枕辺に誘う軽薄な旦那衆も多いのだけれど、本命と目された旦那に愛想をつかされて逃げられてしまうリスクは、こういった派手に立ち回る芸者には常についてまわるのも当然だろ

う。
十四から修行を始めて、十六でお広めをした駒代に荷風はこれらのすべてを経験させることにした。つまりは「腕くらべ」が、当時の典型的な芸者世界の原色絵巻きといわれる所以である。

当時新橋南北の芸者千八百有余名（十、うずらの隅）と言われたが、現今の巨大な産業になり終ったマスコミのタレント集団に比べれば、実に小さな村社会だったろう。当時の東京の中枢で明るい時間に政治、経済、社会を動かしている自信家ばかりの男たちが夜、ほんの息抜きの遊興に耽る中で彼等を慰め、色を添えた新橋芸者の哀楽。

彼等が昼間係わる国家的事業、活動に比べれば取るにも足りないゴシップ（勿論彼女たちにとっては生き死ににかかわる事柄だけれど）が口コミやタブロイドで数日もしない内に隅々まで駆け抜け、伝わるのだ。粋人と言われる一流の知識人たちも、その世界で多く

の口の端にのぼる主だった彼女たちの名前の幾つかは良く聞き知っていた。

彼女たちの名を広める機会はひとつには歌舞伎座で春秋催される演芸会で、そこでの出し物の選択、役の大きさや当人のはまり具合、舞台での映えようはもちろんのこと踊りの技や唄の巧拙、衣裳の趣味着こなしのよしあしまで、あるいは辛辣にあるいは羨望をこめて皆の間に語られるなかで、名妓といわれる芸者たちの虚名も作られていくのだ。

そして駒代もまた、二十六で新橋へ出戻りしてから一年余と日は浅いものの、この春夏の演芸会の踊りで評判を取り、かなり名前は売れてきた。彼女の”いろ”である浜村屋、人気役者の瀬川一糸との熱愛も知らぬものはない。などなど表面はいかにも華やかで順風満帆に見えても、その内実で彼女は様々の問題を抱え、火事場のような修羅場に踏み迷っているといってよかった。

十九の暮れに秋田の素封家の御曹子に引かされて、三年目に晴れて正規の妻となり、その生家へ輿入れしたとみる間にその夫はあっけなく風邪をこじらせて死ぬ。彼女の居る場所はもうそこにはなく、身ひとつで逃げ帰るように東京へ戻ったが、その都会にも彼女が安逸にしばらくでも過ごせるような所はなかった。彼女に出来ることは以前の通り芸者として出直すくらいのことだった。

一から出直しとはいっても、やはり若いときの初々しい気分とは異なるのは道理で、歳をとっただけ男の見方も肥えているし、一度は大家の奥様と奉公人たちから大事にされた思い出もあってプライドも太り、何度かの並み以上の誘いも体よく断って、なかなか親密な屓の旦那がつかなかった。

そんな中で半玉時代からの知り合いだった大会社の営業若手辣腕吉岡に逢ったのは幸運といえるだろう。改めての座敷で見えたときの駒代の姿の描写は、江戸風俗作家の正統を継ぐ戯作家荷風の面目躍如たるところで

ある

「……襖を開けたのは駒代である。

髪をつぶしに結い、銀棟すかし彫りの櫛に翡翠の簪、唐桟柄のお召の単衣。好みは粋なれどそのために少しふけて見えると気遣ってか、半襟はわざとらしく繍の多きをかけ、帯は古代の加賀友禅に黒繻子の腹合、ごく荒い絞りの浅葱縮緬の帯揚を締め、帯留は大粒な真珠に紐は青磁色の濃いのを締めている……」。

この文面から、鮮明な日本髪の艶な芸者の姿がイメージ出来る日本人が今どれほど居るだろうかは置くとして、こういった絢爛たる文章作家の技量が荷風を文化勲章の大家に推したのだろう。

その一夜のうちにも細やかな曲折があって、むかし馴染みの二人が結局は一つ床に入るまでの描写は微細を極めて読むものをときめかす。桑原武夫氏は河出のカラー版全集の解説でこの段に触れ、

「春信や歌麿の春画と同じで、倫理を持ち出

して否定すればそれまでだが、美的に肯定すれば世界的に見事な芸術だといえるだろう」とも言っている。

男ぶりも良く遊び慣れた新橋の常連吉岡を駒代は悪くは思っていない。再会してたちまち駒代に夢中になった吉岡も、最初から彼女を引かせる積もりで馴染みの料亭の別荘まで借り切って泊まり込み、執拗に迫ってくる（五、昼の夢）。

彼女は幸せだった。こんなことは並みの芸者には余り起こらないだろう。しかし、冷静に見れば、吉岡には既に妻が居り、子も設けている。以前の彼ならともかく、今の吉岡に従っても、うまくいって一生日陰に暮らす身分だろう。それに彼には妻だけではない、二人の、妾同様に世話をしている元芸者の女もいるのだ。いくら今当人がそれを否定し、甘言を並べ立てたところで、自分もいずれ彼女ら同様飽きられて疎遠にされてしまうことが目に見えている。

一度正式の妻の身分を味わった駒代であれば、余り結構な条件とはとても思われない。それに二十六という歳が前途にこれ以上の挫折とやり直しをもう許さない気分もあった。

そんな逡巡の日々にたまたま出会った人気役者瀬川一糸と、駒代は恋に陥る。もともと一途な激情の持ち主で、それまでも幾つかの浮き名を流していた一糸は、ほんのお遊び程度にと付き合い始めた駒代が思いもよらず初生で生真面目なことに感じて本気になってしまう。駒代も一糸との交際を存分に利用して秋と次の春の演芸会では随分と演技面やなにやで助言したりしてもらったし、踊りは尾花家の駒代と評判も得た

（九、おさらい）。

一糸と駒代との隠れもない仲を漏れ聞いた吉岡は怒って、意趣返しに彼女の競争相手である同僚の姪婦菊千代を身受けして離れていったけれど、一糸とはかえって公然とした

交際になって、名妓の勲章ともいうべき彼女の役者遊びの浮き名はもう新橋界隈にかくれもない。

もっとも、そういった派手な人気役者との逢い引き、付き合い、演芸会の舞台費用などが大変な出費を伴うことも確かで、借金も重なると今度は多少辛い気分を耐え忍んでも、そういった勘定を無理言って回せるような旦那の枕席を断れなくなってくる。

再び新橋に出始めた頃からも駒代には是非にと言ってくる客はなくもなかったのがずっと断り続けで、たまたま同僚の余り売れない花助から紹介して貰った横浜の骨董商潮門堂の席に引き出される羽目になった。

もともと芸者連中にはもてようもない五十を越した不器用な海坊主のような大男で、もてないことでかえって開き直って、札びらで女の頬を叩いていいようにさせる嫌味な人間であり、行がかり上馴染みにされてしまった駒代は重ねての座敷も辛いばかりで、しか

し貴重な金づるとあれば無下に断ることも出来ず、腐れ縁のようなことになってしまった。

生まれついての淫奔な女ならともかく、駒代も十四からこの道に従ったとはいえ、拠んどころない一身の事情に流された結果の芸者稼業であり、男にいいようにされることでなりたつ芸者の悲しさを一倍自覚することは、その生来の生真面目な性格が芸者の職分と相いれないものであることは明らかだ。

売れっ子の駒代も恋人の一糸と稽古休みの日くらいゆっくり水いらずでと腰を落ち着けたのも束の間で、立て続けの電話で座敷の呼び出しにそうそう断りっぱなしもならず、化粧を直して出向くと当の潮門堂の海坊主の枕席が待っている。

壊されるかと思うほどのそれを凌ぐとすぐ吉岡の濃厚な馴染みの下座敷。先の客と変わってよく様子の知れているだけに一時間半

にわたって虐められ、しかしそれなりに気も遣わねばならず終わったときにはもう肩で息をして口もきけない有り様。

やっとの思いで吉岡を見送って帳場へ立ち返ったが、もう一糸のもとへ戻る気もない、家へ帰る気もない、ただ野原の中へでも身を打ち捨ててしまいたいような情けない気にもなっている。

一夜のうち立て続けに二人まで男を替えて汚し抜いた身体、いくら商売とはいいながら思い出すのも気恥ずかしく、帳場の灯で人から顔を見られるのが辛くてならない……（八、枕のとが）。このあたりの女としての駒代の心のありさまは可憐ともいえる筆致で読者の同情と哀しみを誘う。

荷風もそんな駒代に同情する一方で、正反対の菊千代的姪婦への関心もさらけだすなど男のこころのええかげんさをはしなくも見せている。もちろんロマネスクとしてはただ淫するだけの女よりも、それに嫌悪の感情

を抱きつつも否応無しにその中へ巻き込まれていく（心身共に）波乱と矛盾に満ちた人間の内面、行動を活写することがリアルさを高め、厚みも出て結局はたのしくもあり、描きがいもあるだろうことは確かである。読者としての感情移入も人間らしく温か味のある後者においてより容易で、強くもなるはずだ。

もちろん人間らしく矛盾に満ちた駒代を活写するとなれば、彼女の暗黒面も書かざるを得なくなるのは当然である。

歌舞伎座の舞台で浜村屋の衆の清元を背景にして保名の狂乱を踊って喝采を浴びた彼女も、その舞台を出したがために、売れっ子芸者としてあちこちの座敷に扇子で（座に侍って踊りを見せたりするだけに）呼ばれて回っているだけでは（礼金もしれたもので）商売がゆかなくなっている。

やはり横浜の潮門堂のような剛もてに札びらを切られて呼ばれれば、当面の派手な日常、役者遊びの勘定を合わせるためもあって心ならずも枕に侍ることになる。花形芸者の光と影というべきものだろうけれど、いい旦那がつき、その上に名前が売れればまたそれにはずみがつく。それだけ知らず押し棄られるものが出て恨みを買うこともまた必然だろう。

ここに力次という、駒代に旦那を寝取られたと恨みを持つ古株の芸者がいる。吉岡の以前の女だったのが、駒代に目が移ったあとは疎遠になっていた。駒代自身は一時熱かった吉岡との間も彼女の方で乗り切れず、そのうちに彼女の役者遊びが男に知れて最近ではすっかり切れていたけれど、力次の方では一時の恨みを忘れかねて、ことあらば駒代に報復して泣かせてやろうという気分でいた折に、やはり役者一糸に惚れてしまい、自分につてを頼んできた君竜という二四の女をそれに使ってみようという気になっている。

君竜は以前力次の家の抱えだった芸者で、実業家の老人の妾になって引いたのが最近死に別れ、多額の遺産を得てお暇となった。そこでその元手で芸者家を出そうか、旅館をしようか、待合いをしようか、料理屋をはじめようか。それとも遺産には手をつけずにそれを持参金にして、男がよくて程が良くて浮気をせず、自分ばかり可愛がって我侭のし放題にさせてくれるような家へお嫁に行こうか、そんな勝手なことをいってはいたけれど三年ばかり身持ちは堅く守っていたその君竜がさそわれての芝居見物で瀬川の舞台を見てからは一挙にのぼせ上がっている。

力次はそんな君竜をうまく一糸に引き合わせ、しかも駒代とはどうも性の合わなかった男の継母お半とも意気をあわせてしまった。一糸も花形役者の常で浮気ものであり、たまたま駒代とはしばらく続いたものの、すでに飽きが来ている。駒代とはまた異なった女さかりの君竜に目が向くのは成り行きだった

し、息子の世界にいれあげてすでにかなりの借金まで背負っている抱えの芸者の不安定な身分になかなかいい顔をしなかったお半も、多額の持参金つきで身持ちもしっかりした君竜には最初から気にいった様子で、とんとん拍子に話は進み、縁談までまとまることにはなった。

一時の熱も醒めた男に対してそれと知らず付きまとう女とはなんとも哀れな存在である。それが一代の人気役者を相手に派手な浮名を流し、得意の絶頂を味わった駒代であれば更に惨めな光景になって心をうつ。

作中では一見なかなかの「凄腕」、遊び上手の若手実業家を手玉に取り、一方で役者道楽をして、年一度のうちわの発表会、清元の舞台も見事にこなし評判を取る。

そんな派手な虚像の裏で彼女自身が平凡で純な一人の女として、いくつもの不幸を背負いつつ、真摯に生きたい、自分に正直に生き

たいと願う以上そうあらねばならなかった必然性、真実のようなものはあり、それら彼女のまっとうな生き方が派手になればまたそれに応じて、したたかな世間の反発、そねみやら悪意が起こってくるのもまた納得のいくことで、彼等が手管を尽くして向かってくる以上、純な彼女ひとりが惨めな敗北に至ることはまた決まった結末ではあったろう。そんな全体のすがたも小説では読者にはすっかり理解できるような構造になっており、よりヒロインの哀れも増して我々の心情に滲み入ってくるのである。

つい先日に絶頂にあった駒代が華やかな舞台で演じた保名の狂乱そのままに自分を裏切った一糸の影へ追いすがって、その不実をなじり感情をあらわにしてうろたえ嘆くという、駒代の姿を種にして面白く書き立てるのは今も同じゴシップ新聞である。

そんなうそまこと取り混ぜての噂は噂を呼んで、そのうちに浜村屋の太夫（一糸）が来

年の春襲名興行を機に君竜を女房にするという噂も立つ。瀬川の方でもそれらを追い風にしてますます君竜との縁談を確実のものとする。そんな噂を聞いて駒代はいよいよ自分はだめだと覚悟した。

どうせ、ここにいても芽がでないのなら、いっそ地方の温泉場へでも流れて出直そうかとまで思いつめた駒代だったが、折もおり、身を置く茶屋、尾花家の姐さん十吉の急変でそれどころではない忙しさ。病人の入院やら看病やら、あっけない急逝のあとの法事、後始末に気を紛らせて、その間の決定的な一糸との訣別の次第もかえって彼女の傷をめだたなくさせたのかもしれなかった。

尾花家は跡継ぎの息子が分けありの親不幸で出奔し、十吉の死後残された亭主の呉山老人は自分で芸者家をきりもりしていけるはずもなく、あらためて身辺を見回し、その後継に傷心の駒代をあてようと決める。

講釈師として一時は名をなした呉山は作者の分身で合理主義者でもあり、駒代の評判と発展ぶりを遠目にも痛快に思っていたが、一転恋に破れて田舎落ちしようかと落ち込む彼女の不幸とその孤独な身上を改めて知り、敵手の身勝手さに怒り、また彼女の立場に同情して、家の株もろとも出来払いで譲ってやるから、ここは辛抱して踏みとどまり、世間を見返して遣れと背中を押し奮起を促す。

このあたりに当時の芸者の不安定な立場とその世界の現実のようなものがさりげなく描かれて興味深い。

情念と金に縛られ、右往左往させられてはかなくも生きる彼女たちの生活基盤はなかなか厳しいものだったのだ。彼女たちが幸せに生を全うすることの難しさが思われる。

一篇のヒロイン駒代の幸運を作者のご都合主義ととるか、それとも物語の流れから当然の自然ななりゆきとするか、見方の分かれる

ところだろう。私個人としては、話の筋には何の不自然さもないと思うし、だからこそ最後の感銘も後味のよさもあるのだろう。

どこの世界であれ、さほど簡単に成就するとも思われない、人情と倫理の筋を通してはかなげに生きる男女の賛歌を存分に謳い上げた作者の手腕を評価したい。

完

あきら評

宏一郎氏が言っているように芸者と娼婦は異なる業種のようであるが、女の沙我で、男の性を熟知していかにして男を楽しい気分にするかを知り尽くしている、いずれも「女」を武器にしたものと言う面では同一であると考える。

現代の女性、特に主婦層の中には男の性癖を汚らしいと感じて一向に男のセックスに対する嗜好を理解しない傾向が強くなって来ているのが残念でならない。

因みに、男性器を口に咥えた事が無い女性や、セックスの時に「おまんこ」と言う言葉が言えない女がかなり居るようである。

それだけ男もだらしなく為ってしまったのかも知れない。

キンゼイ報告の中に男が女のパンテーの匂いを嗅いで性欲を高めようとする行為は特別に変態的な行為ではないと言っている、この行為はオスの動物がメスの性器から分泌するフェロモンを嗅ぎ出して性行為が可能か否かを確認するなごりとしている。
が、しかしこの行為を理解し容認出来る女は今は全く居ないに等しい程である。
冒頭の昔の彼女達は実にこれらを体験や教えで、体得し全く健気に男へ奉仕しようとする姿に頭の下がる思いである、たとえ金を得る手段としても許されるものである。
自分も含め、男性諸君ももっと女の教育をしようぜ！

ＰＤＦ化　あきら